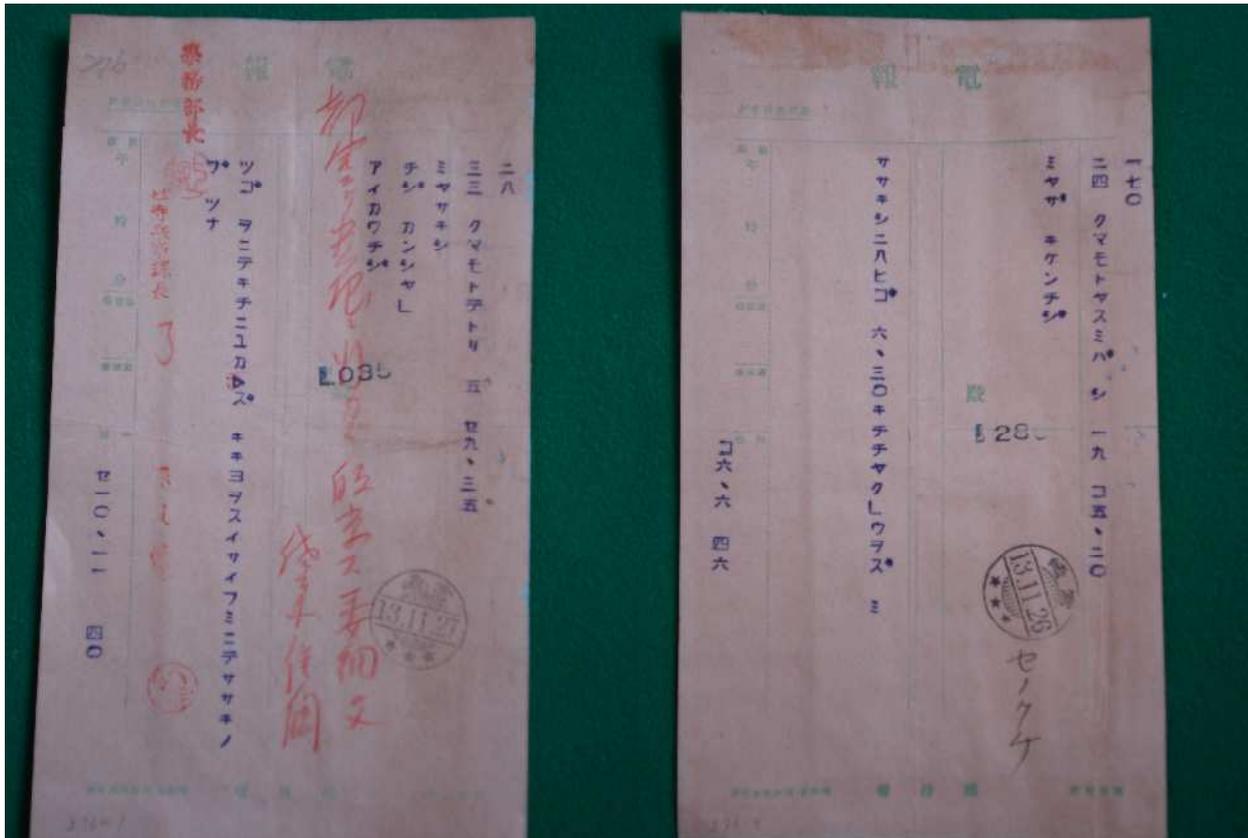


歴史資料文書注目情報

「第1回文化勲章受賞者 佐佐木信綱氏関係の歴史資料文書」

昭和12年、我が国の第1回文化勲章を受賞した、国文学者で歌人の佐佐木信綱氏（生年1872～1963年）に関する文書がありますので、紹介します。

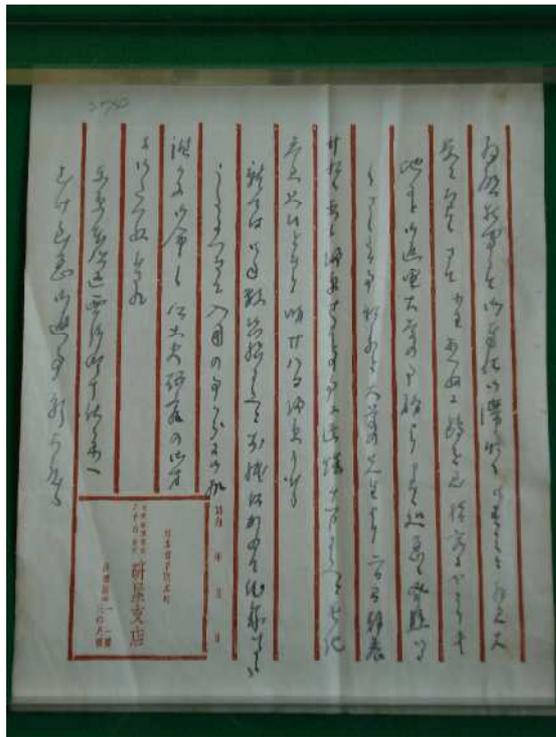
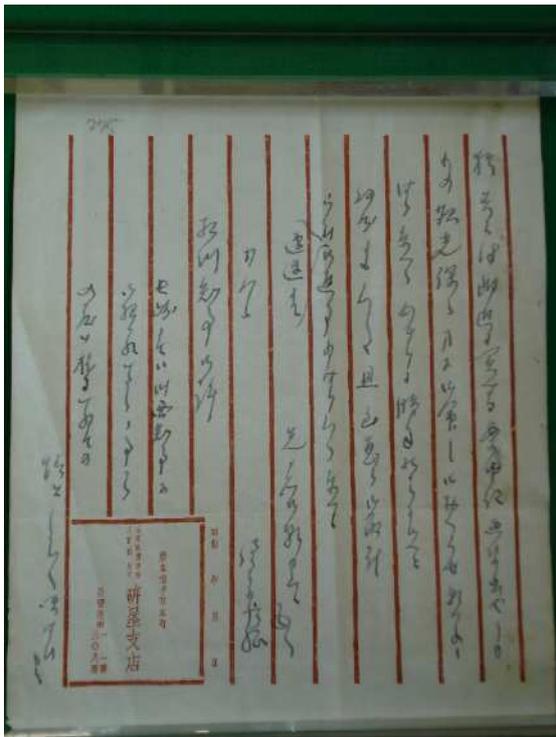
佐佐木氏から相川知事に届いた電報と書簡



【昭和13年11月26日受】

昭和13年、当時の相川勝六宮崎県知事は、美々津の伝説を長歌に詠んでもらうよう、信綱氏に依頼しました。

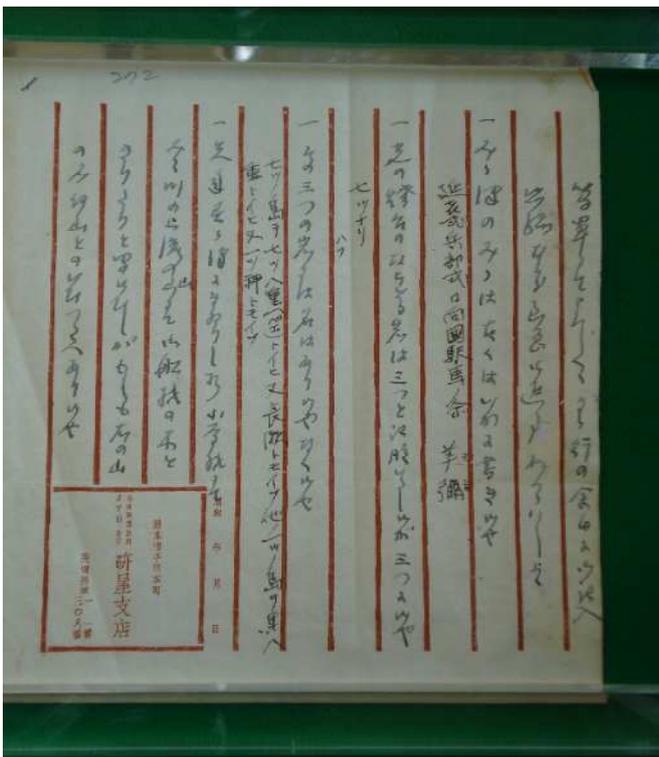
写真資料は、長歌を詠むため来県を予定していましたが、急な発熱のため来県できなくなった佐佐木氏から相川知事宛に届いた熊本からの電報と書簡の一部です。



「あくね」(鹿児島県阿久根市)で鶴を見て、指宿経由で宮崎に行こうと思っていたが、急に発熱した。大学の先生から、2日間静養し11月29日に帰京するよう言われた。残念だが、明28日に帰京する、などと書かれています。

また、「うた」に必要であるとして、別紙に記した質問事項への返事や、美々津付近に関する案内記や画集書のようなものも送ってほしいと依頼しています。

別紙質問事項



写真資料は、質問事項の一部ですが、

『簡単にてよろしく候まゝ行の余白に御記入
恐縮ながら至急御返事ねがい申上候』

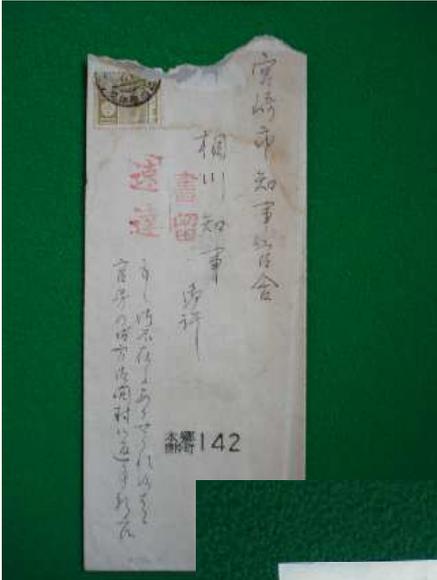
と、文頭に書かれています。

また、質問事項としては、

- 『一 みゝ津のみゝは古くはいかに書き候や
- 一 光の燈台のたちをる岩は三つと記憶いたし候が三つに候や
- 一 その三つの岩には名はあり候や、なく候や』

等、と見えます。

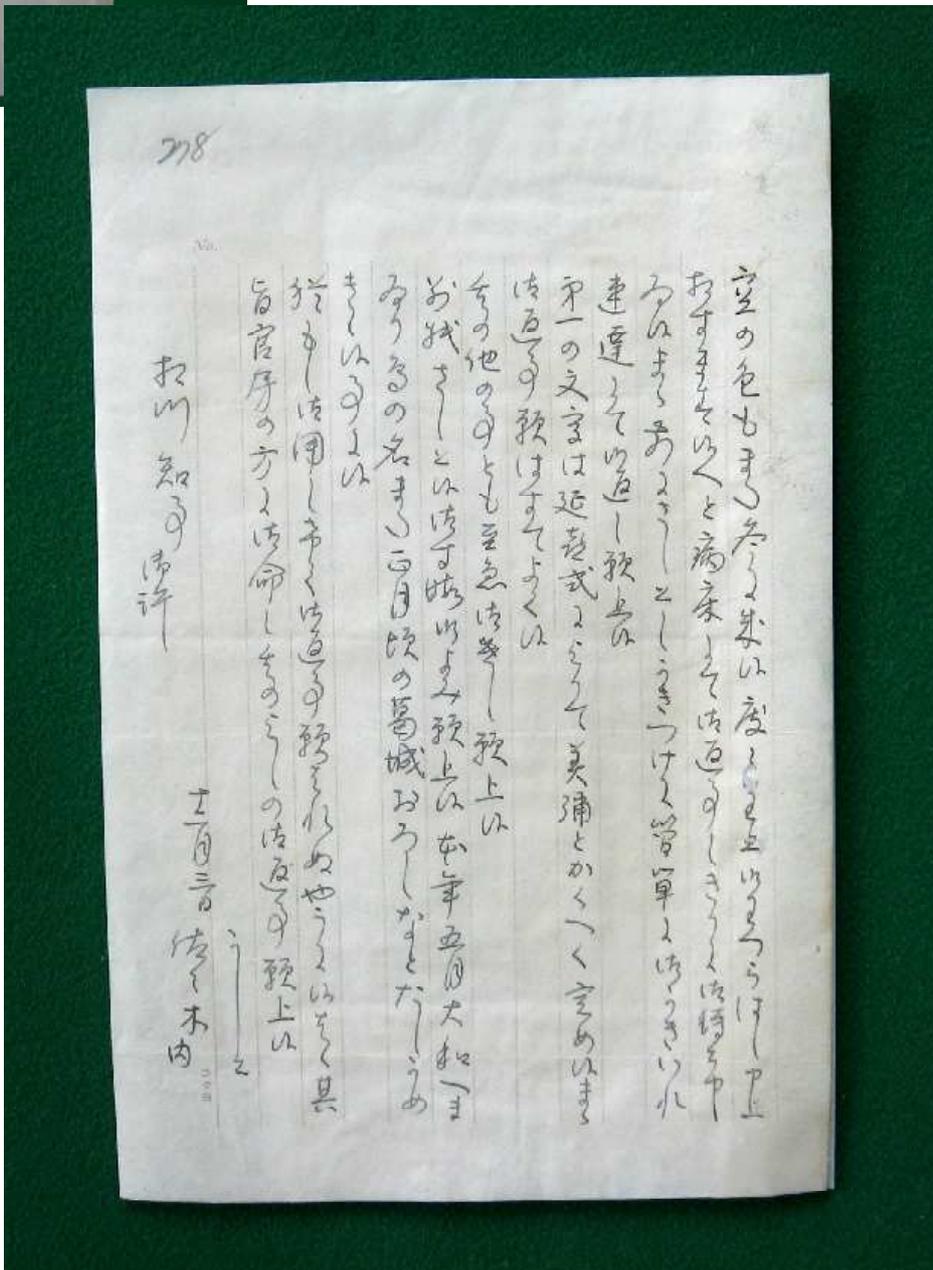
佐佐木信綱氏夫人の書簡



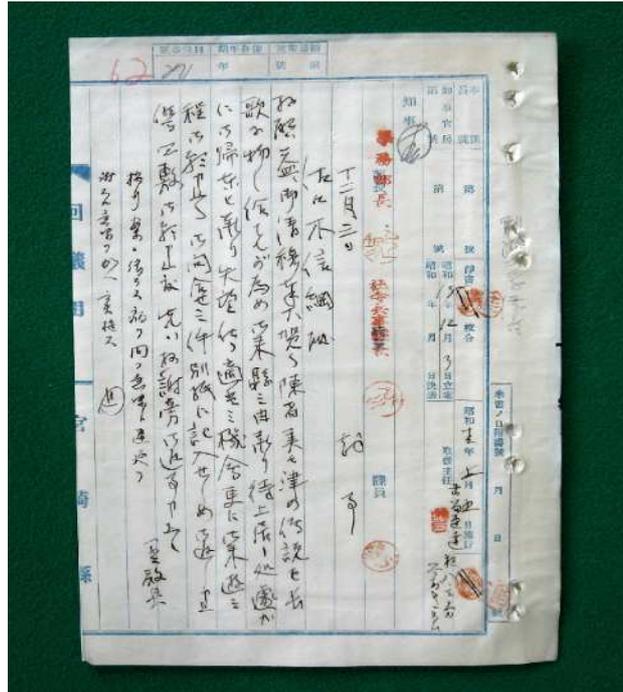
昭和13年12月3日付けで、夫人から、返事を催促する書簡が、相川知事宛に届きました。

『 空の色もまた冬に候 度々呈書御わつらはし申上
相すます候へと病床にて御返事しきりに御待ち申
み候まゝ前にさし上しかき つけに簡単に御かきいれ
速達にて御返し願上候 …… 』

等、書かれています。



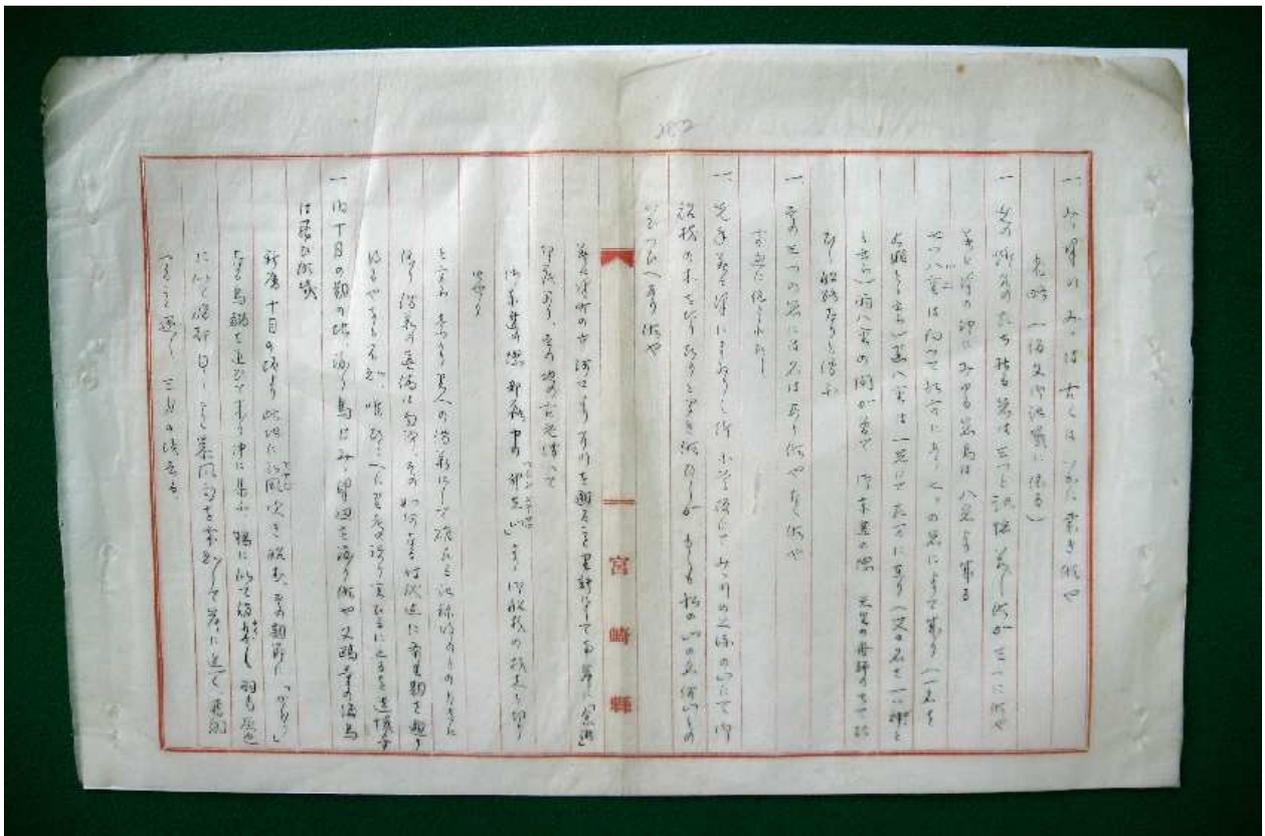
決裁伺書（佐佐木氏への返事）

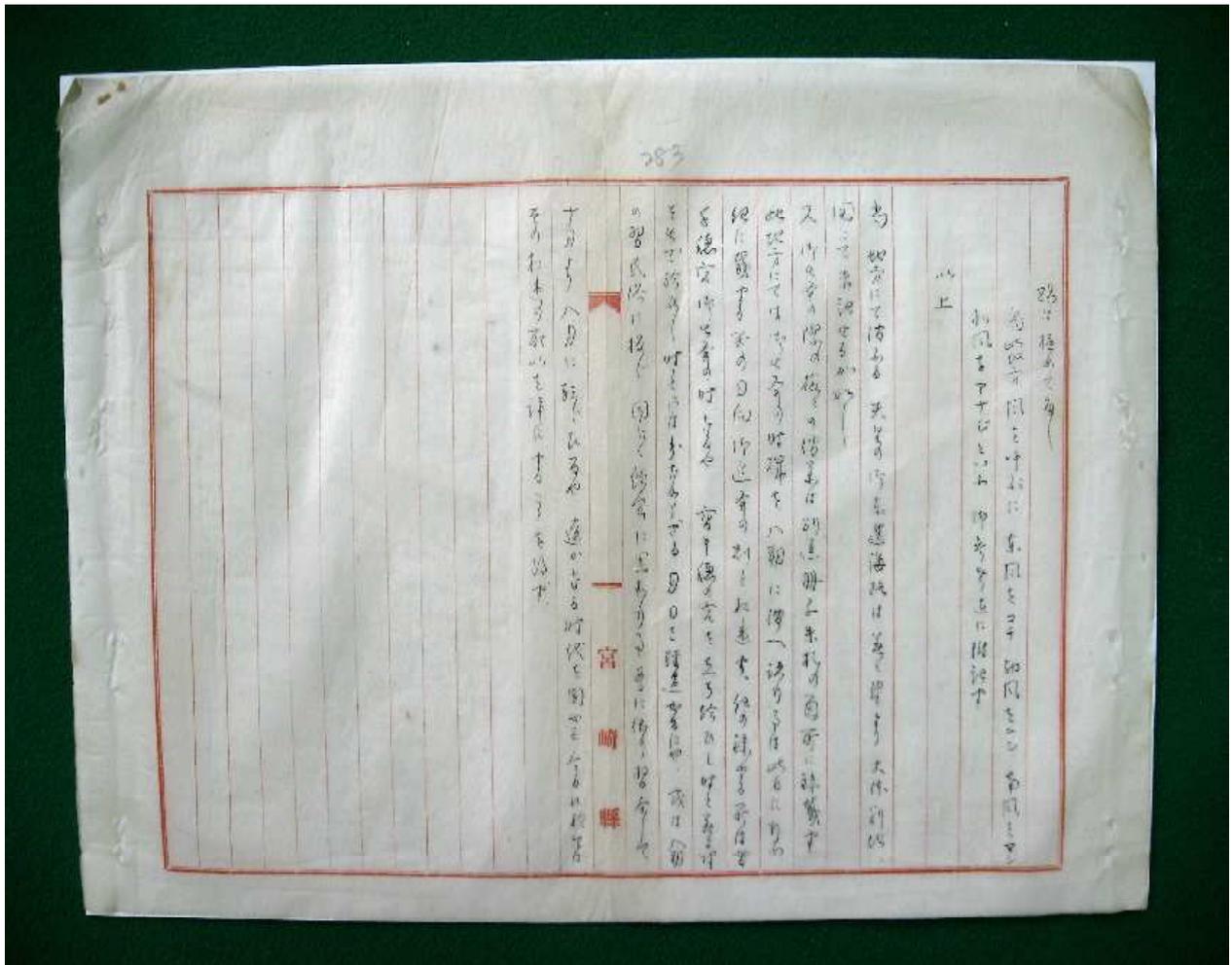


写真資料は、昭和13年の県庁の決裁伺い書の一部です。佐佐木氏の問い合わせに対する回答について伺っています。

『・・・・美々津の伝説を長

歌に物し給はんが為め 御来縣之由承り待上居候処、遽かに御帰京と承り失望仕候 適當の機会更に御来遊之程御願申上候・・・・』等と書かれています。





美々津の伝説に関する佐佐木信綱氏作の長歌

信綱氏が作詞した長歌に、「美美津の御船出」と「日向の御船出」の2つがあり、それぞれ作曲されています。

長歌「日向の御船出」を御紹介します。資料は、「佐佐木信綱記念館」に御提供いただいたものです。

- 引用先「『心の花』第47巻第4号」(竹柏会 昭和18年4月発行) -
提供「佐佐木信綱記念館」

日向の御船出

佐佐木信綱作

時 神武天皇御東征御船出の朝
所 日向國美津の海岸
人 老人、若婦以下、日臣、大來目部
次々に出で來り、或は海に向ひ、或
は海を背にして歌ふ。

老人
老人吾

水背き美津の河口
砂白き美津の波に 誦ひ讀み奉
る

今日し 十月五日の日の曉天
日の皇子の大御船出を
天つ御神守らせ給へ

大き空を仰げば
夜の氣退き 北風晴れて
豊旗雲 ゆたに耀ひ
映き海を望めば
五百重波 千重波頻に
よるこびの色を湛ふ
鳴鐘ふ 沖の黒礁

老婦

老婦吾
老翁と共に 御跡覓ぬ參來て
み恵を偲びまつり み別を惜みま
つる

里長

里長吾
長みて 壽阿まをさく
これの國の里の中 船津の中に
わが里をしも 御船津と定めまし
わが里の匠にしも 大御船造らせ
ましき
驚つ繁群の 動きなく榮えいませ
大海の原の御船降 つつみなくい
ませ

船匠

船匠吾
大命かがふりて

里人等

吾等美津の里人
大御船出 おくりまつると
夜をこめて 門の戸たたき
起きよ起きよと喚び立てて
已がじし作りし眷入園子
ささげまく 此處につどひぬ
鍛冶吾
雄心こめろちし給
皇軍に ささげまつらく

獵人

獵人吾

海人

漁夫吾
此の海の魚 干魚にして
皇軍に ささげまつらく
高つ馬の羽もてつくりし征矢
皇軍に ささげまつらく

農人

農夫吾
豊秋の 新稲もて 醸みし大御酒
皇軍に ささげまつらく

農婦

農婦吾
桑蠶飼ひ とりし糸
針袋 とり添へて

少女

少女吾
朝 夕 手力こめて織りしきぬ
ささげまく 持て參來ぬ

合唱

いざ共に 稱讃をしまつらむ
御稜威の光 穂觸の峯と高く
御恵の波 日向の海と深し
畏まかも 尊まかも
高光るわが日の皇子
國土ひらき給ひ

日臣命

日臣吾
人民 撫でたまふ
尊まかも 畏まかも
高照すわが日の皇子

上つ代ゆ代々うけつぎ
皇師のごと執りまをしつ
今、御舟師のごと執りまをす
見よ曙の空に光みてり
曙の海に望みてり
曙の波に力みてり

來れ大來目部 聞けわが言を
わが日の皇子 神ながら思ほしめ
さく
ひむがしに美し面あり
い行きて 天業狭むべしと

神慮 ことも尊と
久方の天の中心に日の御神いまし
天の下顧の中心に日の皇子います
日の御神四方を照らします如

日の皇子四方をしらしめすがね
海を渡り 山を越えて
國の中心に都づくりしまさとす

天つ御祖 天の八重雲を押し分けて
高千穂の峯に天降りまししゆ
廣を渡り 障を重ね
御民らを愛しみますこと
御子たちを愛しみますことし

御門邊にさもらふ吾が輩
御太刀腰に取り佩き
梓弓手に取り持ちて
まつらはぬ敵も懲め
丹き心ささげまつり
忠 効 盡しまつる

今ゆ後とこしへに
この心 うつろふ世なく
この誠 かはる時あらじ
いざ吾 汝等が爲に言立せむ
海ゆかば水づくかはね
山ゆかば草むすかはね

大君の邊にこそ死なぬ

長閑には死なじ

大來目部

唯々 唯々

海ゆかば水づくかばね

山ゆかば草むすかばね

大君の邊にこそ死なぬ

のどには死なじ

日臣命

日の皇子 行宮にいまして
天神地祇を祭らせたまふ

朝日やや／＼に昇り

み冬の海 波おだしく

今し潮もかなひぬ

いでやさぶらひて

大御船出きこえまつらむ

合唱

いでませり いでませり

八十伴の緒引率ひまして

日の皇子 いでませり

わが日の皇子 いでませり

大御光 六合に

耀ひわたらむ 初の時ぞ

大御稜威 八紘を

掩ひまさむ 初の時ぞ

高光るわが日の皇子

畏きかも 尊きかも

高照すわが日の皇子

尊きかも 畏きかも

後記

此の「日向の御船出」は、宮
崎神宮の御祭に参列しつる時、

神武天皇御船出の聖地美奈津に

ものし、深き感激をもて筆を執

りそめしにて、そが中に、夙く

より考へみて大學にても講ぜし

「海ゆかば」の言立は、日臣命

が、御船出の前に歌ひしものと

の考をも籠めて作れるなり。

去年、鈴木幾三郎氏の幹旋に

よりて、作曲家八木傳氏之が作

曲に當られ、日向にもものして、
想を練り、心を碎かれし結晶と
して、莊重典雅なる曲完成せら
れぬ。来る四月三日の神武天皇
祭に、東京中央放送局より、四
十人の合唱、六十人の合奏によ
り放送せらるゝ豫定となれるを
もて、茲にその歌詞を掲ぐ。な
ほ八木氏は、老人の詞より船匠
の詞までを第一樂章、里人等の
詞より合唱までを第二樂章、日
臣命の獨唱より大來目部の合唱
までを第三樂章、以下を第四樂
章と分たれしままに、第一を御
船出を送りまつりて、第二を皇
軍にささげまつる、第三を海行
かば、第四を大御船出、と分か
名づけつ。

関連参考情報

伝承地美々津及び神武東行について、長歌を詠んでもらうという企画は、「日本文化中央連盟」も北原白秋に依頼し、昭和14年10月「交声曲詩 海道東征」として完成しました。

昭和15年、中央公論1月号に発表され、同年11月20日東京音楽学校で初演され、レコードにもなりました。

また、白秋は、昭和16年3月、宮崎県の招きにより、家族などと共に宮崎県下を巡遊しています。